

人口問題研究所
研究資料第三四号

佐賀縣千歳玉島両村における
農村人口收容力調査中間報告

昭和二十三年八月一日（初版）
昭和二十五年五月一日（再版）

厚生省人口問題研究所

去る二月農村人口收容方調査の打合せのため佐賀縣に出張し、千歳を島原村を經て來たので島原
しほ知についで報告する。与志調査票は既に蕪集済と存つてゐるが、手不足のため集計の重みに至
つていないが、いづれ集計の上は其の詳しい結果について、主たる担当省から報告がなされるであ
らう。

千歳村は全國特産の米作地帯といわれる佐賀平野の南端に位し、東は豊前縣と境を接し、南は約
十軒を距て、有明海に臨んでゐる。典型的な農村である。本村は全く平坦地を總面積は八五〇町
歩ある。これを後に記せる玉島村に比較すれば其の三分の一以下に過ぎない。この八五〇町歩のうち
右田が五〇町歩、五町歩、畑が一五〇町歩、山林〇、七町歩、原野三、七町歩、其の他八〇町歩、
等を含んで九〇、〇町歩という割合を、見渡す限り一番力田で、その田の面を非常に多くの溝川
が走つてゐる。畑は管無といつてよく、廢家は住宅に接した狭い空地を利用して高給用の疎菜を
つてあり、また溝川の土手等の僅かの土地にまで豆作を作つてゐるといふ類をエ地の利用は極
度に行われている。こゝのいう土産であるから燃料資源は貧弱で、環境は溝川の水に生えてい
る葎の莖や僅かの樹木の切株などを燃料として用いてゐる。非農家は山寄りの他村から薪炭を買
つてゐる状態である。稻代と名を詔分以外は作閑地といふものは殆ど無く、田の八〇多までは三毛作
を、裏作として炭の外少量の空豆を作つてゐる。佐賀の農村は比較的機械化されてゐるといわれ
てゐる。先にも述べたやうに耕地の面に溝川が縱横に走つてゐるが其の水位が低いため揚水灌漑の必
要があり、低い田を足踏水車を用ふる外は電動機付揚水ポンプが使用されてゐる。これが部落共
有で大口台位であるが、この部面以外は余り機械化されてゐるとはいえないやうである。以上述べた
やうな土地柄であるから新たに開墾しうる余地は全くない。このことは別の理由から玉島村につい

ても同様に云えることである。

玉島村は佐賀県の北部に位し、一部唐津湾の東岸に面し、北側は山を距て、福岡県に接している。標山村である。土地の利用状況を見るに、総面積二五一五、九町歩の内耕地面積は田が四四五、一町歩、畑二八一、一町歩計七二六、二町歩である。山林は六四一、二町歩、原野は一〇〇七、二町歩、宅地其の他四一、三町歩という割合である。土地は面から東に向つて相当地の傾斜をもつており、村の東の端の鳥嶺という部落のあるあたりは標高六〇〇メートルにも及んでゐる。こゝに地形があるから、海岸寄りの假地には標高六〇〇メートルもあるが山寄りの谷は主として柑橘類の用として利用されてゐる。また柑橘類は海岸寄りの敷百メートルに及ぶ山の可成り上の方まで栽培されてゐる。相当地の面積の山林があるが山が茂く薪炭の如きもの以外は特筆する程の林産物はない。本村は千歳村と近い面積の上から見れば南麓の余地はあることに反るが、それらの土地は何れも急傾斜であるから、獲いて開墾しても雨水を流されるばかりで、南麓余地は殆んど全く無いものと見られる。田は七〇%まで墾作を行つており、粟粟は県の稲産地として唐津市に供給してゐる。

以上主として両村の自然的條件について述べたのであるが、次に世帯人口についてのべる。昭和二三年二月一日現在で千歳村の總戸数は九八七あり、その内農家がどの位あるかといふに、少し調査の時点がずれているが、昭和二二年八月一日の農業センサスの結果では六一三戸といふことになつてゐる。人口は昭和二二年の國勢調査の結果によれば五六三五人である。大正九年以降最近に至る國勢調査人口は灰表の如くである。

大正九年

四八四六八

十四年

五〇〇六八

昭和五年

五、一〇二人

〃一〇年

五、〇六六人

〃一五年

四、九六二人

〃一九年

四、五六三人

〃二〇年

五、七、〇九人

〃二一年

五、六、六八人

〃二二年

五、六、三五人

かくの如く人口は大正九年以來少しづつ増加してまたか所謂準戦、戦時々代に入ると共に次第に減少し、終戦の前年には大正九年以下になつてゐる。しかるに終戦後一時に人口の大増加を来した。いうまでもなく復員、引揚、疎南の關係によるものであるが、軍需工場の作業中止による一時的出稼人口の増大も若干の關係があるものと思われる。終戦後人口は再び減少の傾向を示しているが、それでも昭和の初期より若干多くなつてゐる。こうした最近の人口減少は疎南人口の引揚げによる人口減少が、復員、引揚による人口増加に打勝つたためと思われる。疎南、引揚、復員の状況について一言すれば昭和二三年一月末現在で、引揚者が一六七五帯八一二人、疎南者が二九五帯一四五人、復員者は六八四人、内外地復員は三三三人となつており、疎南者の数の少いことが注目される。引揚、復員によるかくの如き多数の人口流入があつたに拘らず、最近人口数が減少してゐる点から見ると、疎南者は一時は相当多数に上つたことと察せられる。これらの流入人口の生活状態について疎南者は多く農業の手助けを行い、引揚者は多く開墾となつて生活を維持しており、帰農したものは殆どないという。

人口密度即ち一平方軒当りの人口は六六八人で玉島村の一五一人に比し約三・五倍の稠密さである。農家一戸当りの平均経営耕地面積は約九反で、玉島村の一町一反よりも若干狭くなっている。経営耕地面積階級別に農家の分布を見るに（昭和二二年八月一日）

〇、三町未満	一六七戸	二七・二%
〇、五—一、〇町	八九	一四・五
一、〇—一、五町	一一一	一八・一
一、五—二、〇町	一四六	二三・一
二、〇—二、五町	八一	一三・三
二、五—三、〇町	一一	二・〇
三、〇—三、五町	六	一・〇
三、五—四、〇町	一	〇・二
計	六一三	一〇〇・〇

の如くであつて、五反未満殊に三反未満という細農家の割合が非常に高い（五反未満の農家の割合は四一・七%という高率を示している）ことと、一方一、〇—一、五町という中堅的な農家の割合もまた相當に高い（一・二八%）といふことがいえる。それと共に三、〇町以上の農家がきわめて少いことは表に見られる通りである。大経営農家の極めて少いといふことは玉島村についても同様である。農家数についてみれば最も多いのは〇、三町未満の一六七戸で、一、〇—一、五町が一四六戸帯で之に次いでいる。

玉島村の在帯人口について見れば、昭和二二年における総戸数は九四三戸、その内農家は六五五

を統けていることは先に述べた通りであるが、その原因をつきとめるためには終戦後における人口動態と有ゆる型の人口移動と綿密に検査する必要があるが、しかし昭和二三一年二月二五日に於てはお相当多数の疎開人口を擁しているという事実から推察すれば、玉島村に於ては千歳村に比して疎開者の引揚が進捗してないことがその一因をなしているのではないかと想像される。このことを事実とすれば、それは後に述べる他の根拠と共に玉島村がより大なる人口収容力を有していることを裏書しているものと解されぬこともないであろう。

玉島村の人口密度は一平方料につき一九一人で千歳村の約三五分の一に過ぎない。これは両村の人口数がほぼ等しいのに、玉島村の面積が広いからである。

農家一戸当りの経営耕地面積は田畑を合して一、一町歩で千歳村の〇・九町歩に比して若干広くなっている。経営耕地面積広狭別に農家の分布を見ると、そこには次第に示されている如く、千歳村に於けるとは違った特色が見られる。

〇、三町未蒔	九八戸	一五〇%
〇、三―〇、五町	七〇	一〇七
〇、五―一、〇町	一六一	二四六
一、〇―一、五町	二〇五	三一二
一、五―二、〇町	九二	一四〇
二、〇―二、五町	二八	四三
二、五―三、〇町	―	―
三、〇―五、〇町	―	〇、二

右の如く、一〇〇——一五町に最大値があり、しかもそれは三二二と相当高率である。

一方〇五町未満という零細農家は千歳村に比して非常に低率である。二〇町以上の農家の少いことは千歳村と全く同様である。千歳村に於ては耕地は殆んど全部田であり、玉島村においては相当廣面積の畑を含まれているので、一農家当り耕地面積を以つて直ちに兩村の経済的地位を比較することはできないのであるが、とにかく農家の耕地面積は一般に玉島村に於てより真正に近いということ、五段未満殊に三段未満の零細農家の割合が高いという事實は、とりもほおさず、千歳村に於ける農家人口の土地に対する圧力がそれだけ高いことを示すものである。

次に兩村の産業経済の概況について、先づ農業から述べる。千歳村の昭和二二年度の稲作の作付面積は五〇二六町歩で、その収穫は一七〇二三石となっている。麦当りの収穫は三石四斗となる。麦の作付面積は三二三二町歩でその収穫は三六二七石、麦の収穫は一石一斗である。

一方玉島村においては稲の作付面積は千歳村より可成り少く三七〇町歩で、その収穫は八八八〇石位で、麦当りの収穫は約二石四斗であり千歳村に比し可成り少い。これは地形上玉島村では田が高冷地にまご及んでいる関係上、日照、気温、その他の生産条件に於て不利であるためであるが、平地地のみについて見れば殆ど差違はないようである。麦の作付面積は二三〇町歩で、矢張り千歳村より少いが、収穫は約三〇〇〇石、麦当り収穫は一石二斗と千歳村よりも却つて多い。こうした生産統計は、殊に現在の如き供出制度の行われている時にはそのまゝ信用できないが、玉島村において麦の麦当り収穫が多いということは興味ある事情と思われる。というのは玉島においては農家

は果樹の栽培によって莫大な所得を得ており、従って他村に比して肥料を購入する資力に於て豊かであると考えられるからである。肥料の商相場は玉島村が縣下第一といわれているが、それは玉島村農家の購買力が豊かである。ここに肥料が流れ込むことを示すものである。これらの肥料が果樹ばかりでなく、麦にも比較的豊饒に施されるということは何れも恐ろしいことである。

それはとにかくとして、千歳村は米作専門で、農業経済の上から見れば至って單純な村である。その点玉島村の如く多角的農業を営むものに比べると不利な地位にあることは争えない。

縣下第一の靈谷村といわれる玉島村の強味は土地の多角的利用に、特に果樹栽培にある。そこでその沿革について簡單にのべておく。なお玉島村農家の副業として養蠶、製紙はかつては靈谷村の地位を占めており、村の経済的特色を知る上にも役立つと思われるので、その経緯についても述べておこうと思ふ。

玉島村に於ける柑橘類栽培の起原は平原という山崎りの部落に井上という先覚者が居り、明治の初期に柑橘栽培の最盛地である平原盆地に栽植を始めたことにある。それ以来大正の初期までには可成り普及し、現在では全村に及んでいる。昭和の不況時代には苦況に立ったがそれでも稲作よりは有利であったという。しかるに昭和十一年頃から市況が好転し戦時中は肥料不足の不足にも拘らず果樹の保存に努めたことが幸して現在では非常に恵まれた境遇にある。現在縣下第一の産地とされている。栽培面積三〇〇町歩で、温州が二〇萬貫、夏蜜柑が五万貫位の収穫がある。この外海岸寄りの産地を利用して枇杷が栽培され、これが二万貫位の収穫がある。以上柑橘類と枇杷とで二七万貫位取れるので、これを假に賣当り一〇〇町歩で売却するとすればその価格は二七〇〇万円となり、全農家六五五戸の内果樹を栽培する農家を假りに五〇〇戸と見ても、その一戸当りの平均所得

は五万四千円となる勘定である。所謂密柑業の波に乗って寮屋の新築修理を行ふものが少くないという。

すでに述べたように、昭和二二年度の千歳村の米の生産は一七〇二三石であり、その七二%即ち一二四三六石を供出したから、供出価格は石当り一七五〇円として計算すれば総額二一七六万円で、玉島村の密柑の価格にも及ばないことになる。玉島村では二二年度に米一二〇〇〇石の供出をしているが、この分は余分の所得ということになる。

また玉島村は唐津市に対する論菜の指定供出地域であり、その所得も相当ある筈である。この点も玉島村にとって有利な条件といえる。かくの如き状況であるから、養蚕の見地からすれば玉島村が非常に恵まれた地位にあることは明かである。なお玉島村農家の副業として現在ではその重要性を衰えているが、昔では盛んであった養蚕と製紙について簡単にふれしておく。

養蚕は以前には農家の重要な副業であり、昭和八年度の最盛期には収穫量は一二〇〇〇貫に達した。その後柑橘栽培の発達と並比的に衰微し、現在ではその一割即ち一ニ〇〇貫程度を生産するに過ぎない。桑園も現在では僅かに七町歩位しかない。養蚕は今後復活する見込はないものとされている。というのは、労力の欠から、養蚕は東樹栽培よりも人手がかかるのみでなく、果樹の消毒が桑葉を通じて蚕に薬害を與えるからである。また果樹栽培を中止しない限り桑園を依る余地もない。製紙（チリ紙、藤子紙）は昔では養蚕副業の主位を占め、本村の中央を西に流れる清流玉島川の川添いの農家で紙を漉かざるものなしという盛況であったが大正九年の不況で個人経営は中止され、企業家が之に代って継続したが、昭和十二年度中止、現在は原料の関係もあり殆んど行われていないが、將來は養蚕不況対策として復活する可能性があると見られている。

当時原料棉は村内で栽培もされ、また九州の他縣からも移入されていたが現在では密植畑の調整のため原料は土地では得られなくなっている。現在川添いに資本金百万円を製紙工場が建設中であるが工業は此々となり、いつ完成操業するか見通しがかないという。

以上西村の農業を中心にして述べたのであるが次に工業の概況について述べる。

既に述べた通り、千歳村は豊村に於ては至島村に比して恵まれていない。しかし恰もその弱点を補うが如くに、工業に於ては至島村に比して稍々見るべきものがあるといふことは、人口圧力を緩和せんとする人々の意識的努力の結果であるが、または天より與えられた偶然の恵によるものであるが、とにかく興味ある事柄である。

すなわち昭和二二年の生産額について見れば、千歳村の総生産額の内農産の八五・七％に次いで工業が一三、三％を占め、その他の産業の生産額は殆んど無視しうる程度であつて、本村における工業の重要性がうかがわれる。

昭和二二年度の調査によれば、精米、製粉製麵工場が、兼業工場をも含めて一七工場あるが、その最大規模のものでも七・五馬力モーター一台、従業員四人、加工賃も夫々二乃至三万円程度のものである。

生産種類の比較的多いのは、仮、煉瓦製造と製織で、仮、煉瓦製造では工場数七、その内従業員五人以下という小工場が五、従業員五人以上の中小工場が二つある。原料は耕土の下にある臨性の粘土が用いられている。工場の規模は何れも小さいが、生産額は各工場共一〇乃至三〇万円位で製織と共に村の経済にとって相当の重要性をもつものと思われる。製織は専業のものが三工場あり、三馬力モーター一台、従業員三乃至四人という規模のものであるがその生産額はそれぞれ十数万円

である。この外兼業の小工場が一つあるがその生産額は三万四程度のものに過ぎない。

以上の諸工場の外に、農具の製造修繕の工場が二つあるが、その規模はさわかめと小さく、いわゆる村の銀治屋で生産額は各々二万四以下である。この外兼業の小さな製材所が一つあるが、加工材は一五〇石程度の微々たるものである。要するに、瓦、煉瓦及び薪の製造が比較的重要な工業で他はいうに足りない。

以上の外に、農閑期を利用して家内工業的なものがあり、自給の原料による瓜の製作などは農家の女子の手によって行われ、佐賀県第一位の生産を挙げている。なお製織の方はその原料を他郡から移入して賄っている。この外有明海の牡蛎殻を材料にして牡蛎灰を作って、村の特産品となっているが余り重要ではない。

一方玉島村の工業は干潟村に敵べると誠に微々たるもので特にいう程のものはないが村内に相当広い山林をもっている関係から製材工場、木工店工場が若干あり、製材工場のあるものは従業員四人、動力一口馬力モーター一台で一口万四以上の生産を挙げている。また自動車用の薪を作る工場があるが従業員四人、生産額三万四以下という小規模のものである。

玉島村で唯一の大きな工場は九州ロープ株式会社の工場で、従業員二七名、動力二〇馬力、三馬力各一台を使用してマオラン織造の製造を行っている。しかしその生産額は三十数万円に過ぎない。この会社の資本は廻らく唐津市あたりから出ており、また工場の規模からいって、雇傭の機会をいふ点から見ても村の人口に対して重要性はないものと思う。

既に述べた通り製紙は現在では重要性を失っている。

要するに干潟玉島兩村の産業事情を一瞥にして言えば、干潟村においては農産物と工産物を除け

は他の生産物は全く同様にないが玉島村においては農産物以外で特に挙げる程のものはないが、ただ生産は蠶糸、畜産物、林産物、水産物、工産物の各種産業に及んでいて特徴がある。農業については多角的に経営され、それが玉島村にとって非常に有利な条件をなしていることは既述の通りである。

以上自然、人口、産業経済の概況を述べたのであるが、これによつて千歳村の人口圧力が玉島村に比して高いということは先づ間違いないので、千歳村に於ける野刺人口の度合は玉島村に比較して高いということが云える訳である。

千歳村に於ては昔から隣村者が多く、炭坑や朝鮮、満洲へ出稼するものが相当あったということである。また千歳村は従来特に貧困という訳ではないが、村内の貧富の差は比較的著しかったと云われている。このことは経営耕地面積広狭別農家の分布に於て、三町未満の零細農家の割合が非常に高率であることから察せられる所であるが、貧富の懸隔の一つの原因は副業関係によるものと云われている。とにかくこれらの事實から見ても本村は従来から高い人口圧力の下にあったということが窺われる。

玉島村は之に反し、昔から出稼のない村で、寧ろ手不足で他地方から人口が流入する傾向にあるが、このことは玉島村に於て経済實際に対する人口に圧力が比較的低いことを示すものと考えられてよいと思う。

なお参考までに昭和二三年度の両村の賦税について見ると千歳村の歳入歳出（決算による）は夫
夫九七、八九四円、八〇、七四二円、繰越一七、一五二円となつていて、玉島村は歳入歳出
が夫々一六七、三五四円、五二、六七五円、繰越一四、六七四円となつており、玉島村の方が歳入

放出共ほほ二倍に近い額を示している。兩村の人口は大体同数であるから玉島村民が財政を賄う上に於てより多くの力をもっていることが察せられ、従つてその背後にある地の経済力に於て豊かであることが察せられる。

兩村に於ける人口圧力の差違をもっと明確に把握するためには、自然的條件の精密な分析、人口動態、人口動態及び人口移動に關する長期にわたる正確な資料、衛生に關する綿密な資料、産業経済に關する詳細な資料が得られなければならないが、価値ある資料を十分に得られなかつたことは残念である。

以上を要するに、玉島村はその人口の割合に広い土地に恵まれており、しかもその土地は十分利用されうる如き経済的條件を具體ししているということが云えるのであつて、これが玉島村として舊裕村たらしめていたものと思われる。

原始産業特に養蠶に依存する限り、人口收容力を規定する根本的要因は土地の広さであり、これに次いで土地の高度利用ということであることは自明の理である。しかし土地の広さには自ら限度があるから、当面の努力の重点は夫々の土地の最高度の利用に置かれなければならない。しかし土地の利用ということとは之を村の立場、各農家の立場からのみ考へることは誤りであつて、日本全体の立場から、各村の特殊條件を考慮して決定しなければならない。かかることは敢りも直さず国土計画の目標である。国土計画がともすれば工業立地の向來、都市計画であるかの如き誤解を受け易いが、我國人口が近い將來に於て相当高度に養蠶に依存しなければならないという事情の下に於ては、養蠶に利用しうる土地の経済的価値を国全体として見て最高度に發揮する如く、しかも占界経済の更地に於て出来るだけ合理的である如くに土地の利用計画を樹立する必要があると思われる。

千歳村と玉島村はほぼ同一の人口数を擁し経済資源に於て恵まれる度合を異にする二つの村であるが若し経済資源に於てほぼ近似の水準にあるに拘らず、その目標とする人口数に於て可成りの差違のある二つの村が存在するならば、その二つの村の比較研究は人口収容力の調査に更に有益な示唆を與えるものと思われる。昭和二年以来人口向題研究前に於て農村人口収容力調査を行った村は既に相当の數に達しているので、こうした條件を具えた村を見出すこともあるいは可能であろうといふ希望をもっている。

(島村 技官)